

横浜市旭区・瀬谷区薬薬連携研修会での 有害事象(下痢・悪心嘔吐)の評価に関する理解度調査

○松本 光司¹、近藤 一成²、塩川 尚恵³、松崎 貴志³、東垂水 裕和⁴、小串 興平⁴、西崎 百合絵⁵、櫻井 学⁵、泉 和孝⁶、久保田 充明⁶、日向 彰²
¹クリエイト薬局 旭二俣川店、²旭区薬剤師会、³聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院 薬剤部、⁴横浜旭中央総合病院 薬剤部、⁵神奈川県立がんセンター 薬剤科、⁶瀬谷区薬剤師会

背景

神奈川県横浜市旭区・瀬谷区薬剤師会は、聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院、横浜旭中央総合病院、神奈川県立がんセンターと薬薬連携研修会を共同主催している。がん領域に関しては毎年1回開催し、2024年度で5回目を迎えた。

目的

薬薬連携を進める中で病院と保険薬局の薬剤師が共通認識を持って業務にあたる必要がある。そこで今回、抗がん薬の支持療法において有害事象共通用語規準のGrade評価を活用できるよう薬薬連携研修会を開催し、理解度調査を行った。

方法・結果

◆ 2024年12月、横浜市旭区・瀬谷区薬薬連携研修会にて下記の通り実施した。

講演内容	時間	担当者
乳がんの薬物療法について	20分	神奈川県立がんセンター
悪心・嘔吐のGrade評価*	20分	聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院
下痢のGrade評価*	20分	横浜旭中央総合病院
症例提示「悪心・嘔吐」*	10分	クリエイト薬局旭二俣川店
症例提示「下痢」*	10分	えがお薬局三ツ境店

*各講演にてQRコードを使用し参加者全員がGrade評価を行う方法をとった

◆ 研修会后、病院と保険薬局の薬剤師49名に対してGoogle フォームによるアンケート調査を実施した。(回答率98%)
◆ 回答は5段階のリッカート尺度(1:理解できなかった/そう思わない~5:理解できた/そう思う)を用いた。

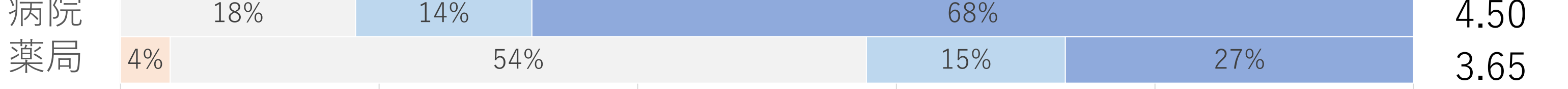
症例提示での使用スライド



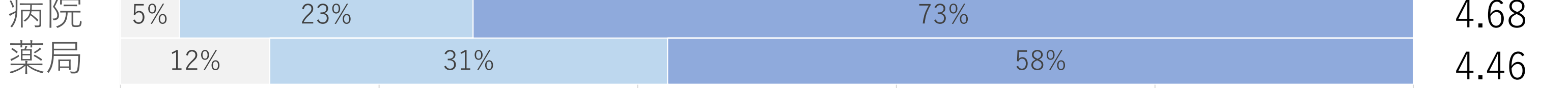
- 保険薬局薬剤師は病院薬剤師と比べ、Grade評価への理解が不十分であり、活用できていない割合が高い。
- 研修前後でのGrade評価に対する理解度は、病院薬剤師で 3.77→4.36(p=0.09)、保険薬局薬剤師で 2.92→4.23(p<0.05)と向上しており、保険薬局薬剤師で有意差を認めた。
- 研修会でGrade評価についての理解が深まり、今後の業務に対する意欲が高まったという回答は病院・保険薬局薬剤師いずれも4を上回った。
- 今回の研修会が今後の業務において有意義な内容であったとの回答は100%であった。

	病院 n=22 (%)	薬局 n=26 (%)
本日の研修会は今後の業務において有意義な内容でしたか		
はい	22 (100)	26 (100)
いいえ	0 (0)	0 (0)

「乳がんの薬物療法について」の内容は理解できましたか



「悪心・嘔吐のGrade評価」の内容は理解できましたか



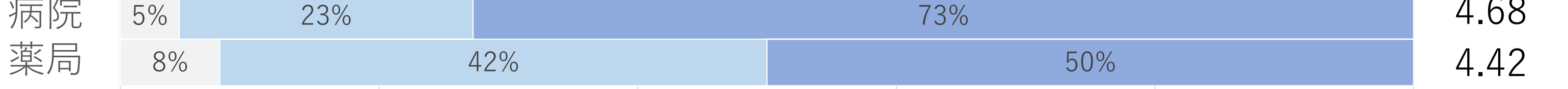
「下痢のGrade評価」の内容は理解できましたか



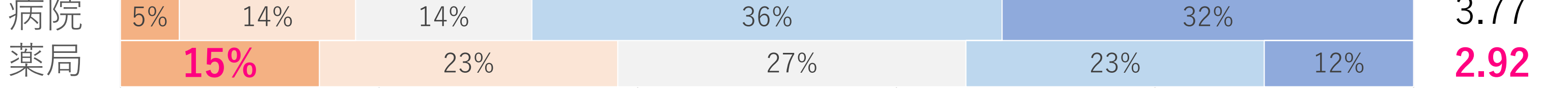
症例提示「悪心・嘔吐」の内容は理解できましたか



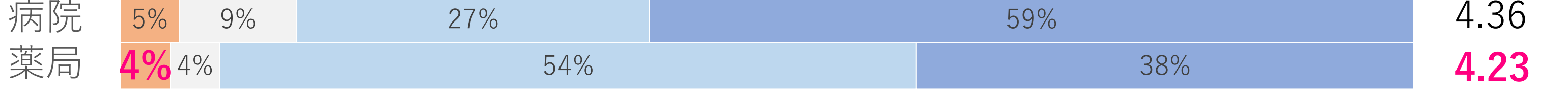
症例提示「下痢」の内容は理解できましたか



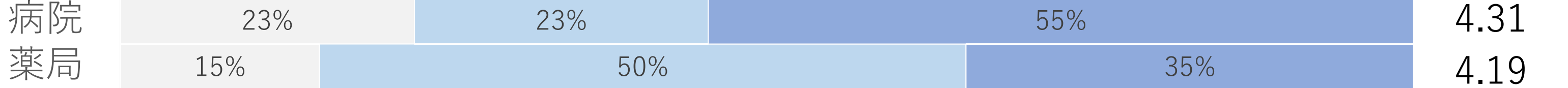
研修会前時点でGrade評価を理解できていましたか



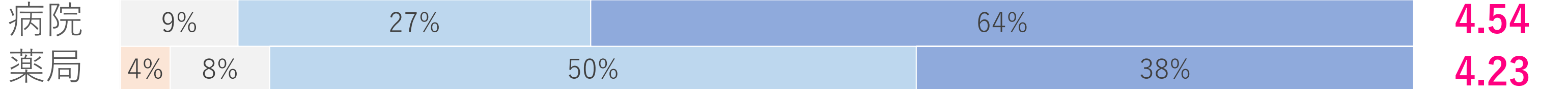
研修会前と比べてGrade評価ができるようになりましたか



今回の研修はトレーシングレポート作成に取り組むきっかけになると思えますか



今回の研修は薬剤提案に取り組むきっかけになると思えますか



0% 20% 40% 60% 80% 100% 平均値

■ 1:理解できなかった/そう思わない ■ 2:やや理解できなかった/ややそう思わない ■ 3:どちらでもない ■ 4:やや理解できた/ややそう思う ■ 5:理解できた/そう思う

考察・今後の展望

上記結果より、本研修は理解度向上に寄与しており、有害事象を適切にGrade評価することで地域全体でより安全で質の高いがん薬物療法の提供に貢献できると考える。

特に保険薬局薬剤師においては、今後の業務への活用が期待できる結果となった。これまでは抗がん薬の支持療法に携わったことがあるものの、トレーシングレポートの作成やGrade評価の活用ができていない割合が多いことから、病院からの情報提供書についても活用できていなかった可能性が考えられる。患者が受けられる医療サービスに差異がないようにするため継続して病院と保険薬局間での研修会等による治療方法の共有や知識の充足を図る必要がある。

今回の研修が有意義であったとの回答を得られていることから、他の有害事象についても同様の研修会を行いたい。知識だけでなく経験の不足を補うためにも症例を提示し全員参加型の研修を実施する必要性があると考え、病院と保険薬局双方にとって今後の業務に活用できるような現場に則した内容を取り上げる研修を実施し、よりよい薬薬連携を進めていきたい。